

世話人所感 No. 7

『心を寄せ、人に寄り添う』

酒井明子

第25回看護未来塾世話人会は平成31年2月23日に開催されました。この日は皇太子さま59歳の誕生日、翌24日は天皇陛下在位30年記念式典の日です。5月1日の天皇陛下の譲位と皇太子さまの新天皇即位に伴い、平成が幕を下ろすまであと2か月。我々も常に変化し続ける新しい時代に向けて議論を重ねました。

世話人会（2/23）の議論の様子

3月9日（土）13:00-17:00、兵庫県立大学地域ケア開発研究所（サテライト：日本赤十字看護大学）で、第6回勉強会、第2弾『朝までやらないけど、生討論会！』を開催します。テーマ1は【看護教員と臨床とのつながり方改革】70分間、休憩後、テーマ2【ここは譲れない！看護の本質】110分です。本日は、討論者の決定や時間配分、会場の使用方法など企画の最終決定を行いました。多くの方々の参加をお待ちしています。

次に、月刊誌で看護未来塾での議論を特集する案について検討しました。2017年9月看護未来塾発足後、世話人会・勉強会を開催し、その都度ホームページなどで公開してきましたが、特集は更に看護界全体で共有できるような新しい取り組みの一つとなります。本日は、企画意図・掲載内容・執筆者について意見交換しました。

その他、Nurse Practitioner 制度の構築などの情報提供とそれに伴う議論や変革のための提案もなされました。

心を寄せ、人に寄り添う

私は、世話人会の前日まで、東北の災害公営住宅住民へのイベントや自治体職員と避難所シミュレーションを行っていました。震災から8年が経過し、災害を体験していない職員も増えてきたので、他の地域での災害から学んでいきたいという依頼があったからです。

ここで、避難所を運営された方の印象的な言葉を紹介します。

「災害発生直後避難所に入った時、避難所の中にそれぞれの家庭があると思った。そして、避難所はコミュニティ。一人一人の避難者と向き合うだけで、特別なルールは作らなかった。決めたのは、起床と消灯時間だけ。そのうちに、段ボールに名前を書いて洗濯機使用順番が決められたり、蛇口一つだけの洗面所にコップと歯ブラシは持ち帰りましょうと貼り紙が書かれていたり、自分たちでルールを作って自分たちで守っていくようになった」
「最後まで仕切りは置きませんでした。最初の頃は避難者が多く、物理的に不可能でもありましたが、他にも理由がありました。歩行困難な高齢者が夜中にトイレに行くとき、回りの人が誰とはなく起きて介助されており、そのひとりから仕切り置かないで、介助できなくなるからと言われたからです。また、それぞれひとり暮らしだった2人の高齢の女性

が避難生活をしていましたが、この2人は同じ集落で、もともと仲が良かったこともあり、いつも布団を並べて一緒に眠っていました。食事も風呂に入るのもいつも一緒でした。こういう人たちを仕切りで囲ってしまうことが、私にはちょっと想像できませんでした」

この避難所運営者の方は、避難者と共にあり、住民に心を寄せ、寄り添った運営を貫いておりました。

災害多発時代を迎え、最近の被災地状況について思うことは、能動態－受動態（「する－される」関係）の二項関係が強いことです。能動側には、意志と責任が帰属・追求され、受動側にはそれを受け止めることが求められます。自ずと効率的・管理的になる構図です。このため、個々の被災者のニーズの把握・対応よりも、ニーズの調整を効率的に処理することが優先されます。支援者は、統括者の指示には対応していますが、個々の被災者はおきざりになっている姿です。最近、能動態－受動態（「する－される」関係）以外の中動態の議論が注目されていますが、上記の避難所運営者の言葉にみるように、「心を寄せ、人に寄り添う」営みに心が癒されます。「心を寄せ、人に寄り添う」ことが、「どうすれば、安全が保障されない人々をなくすことができるのか」を問い続けることにつながるのではないかと思います。

<陸前高田の今>2019.2.22

